

古生物学の発展と博物館の役割

北里 洋

海洋研究開発機構地球内部変動研究センター

Roles of museum activity for the development of paleontological sciences

Hiroshi Kitazato

Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology, Institute for Research on Earth Evolution, 2-15 Natsushima-cho, Yokosuka 237-0061 (kitazato@jamstec.go.jp)

はじめに

自然史科学は、化石などの自然に存在する実体を持った“モノ”に基づいた学問であり、研究標本類や資料を収集・保管する自然史博物館は極めて重要な役割を担っている。博物館は、また、自然史について情報発信するハブとして、その役割がますます高まってきている。日本古生物学会 05・06 年度将来計画委員会では、古生物学の発展を図る方針と方策を議論してきた。シンポジウムでは、委員会での議論を踏まえ、日本古生物学会が古生物学の発展を図る際に博物館やその活動をどう位置づけているのかについて述べた。

古生物学における博物館の役割

日本古生物学会は、日本学術会議古生物学研究連絡委員会、自然史学会連合、地球惑星科学連合などと密接に連携をとりながら、古生物学の発展と振興を促すような方策をいろいろと提案してきた。例えば第 16 期、17 期の日本学術会議古生物研究連絡委員会では、池谷・平野・小笠原委員が中心となって古生物タイプ標本のカタログを作った。この古生物タイプ標本のカタログ作りは、自然史あるいは分類学関連学会の中でも先駆けたものであった。現在、日本分類学会連合がタイプ標本のカタログやアーカイブを作成しているが、古生物研究連絡委員会が作成したカタログはその模範となっている。また、第 18 期には「古生物学の現状と将来、基礎理学の重要性にかんがみて」という対外報告を発表した。ちょうどそのころ、「学会や学問分野は、より社会に、そして tax payer (納税者) にどう貢献できるかを考えよ」という意見が出始めるようになってきたことを受け、これを機会に、「古生物学という地球と生命の歴史を扱っている学問がどのような科学で、それは社会にどう貢献できるのか？」を考えてみようとしたのである。対外報告は、古生物学を「知の創生」、「知の伝承」、「知の伝播」、すなわち、サイエンス・教育・社会貢献の 3 つの視点からまとめている。自然史博物館の活動は、この 3 つの視点のいずれにも関係し、大きな役割を担ってい

る。博物館は研究を行い、後継者の教育をし、そして「身の回りの自然がどういう歴史を持っていて、どういう理屈で動いているのか？」を社会に対して解説しなければならないからである。

シンポジウムおよび本特集のテーマは「古生物学のアウトリーチ —博物館での取り組みを例にして—」である。私たちは、地球と生命の歴史に関する考え方や知識を、地球に生活する人類の基本的な知識として広く社会に伝えていく必要がある。その時に博物館は非常に重要な役割を担うに違いない。俯瞰的に述べれば、博物館は研究と収集、保存・保管、展示、教育、普及というようなアクティビティーの中心に存在している。

博物館のうち、とくに地域博物館の活動には幾つかの柱があるだろう。第一は、身近な自然の成り立ちを示し、その不思議さや面白さを理解する中から自然全体における普遍性を知っていくアプローチがある。例えば徳島県の場合、中央構造線や和泉層群のコダイアマモなどの地質学的あるいは古生物学的な事象を鍵にして、地域の自然の成り立ちとその意味を伝えていくことなどが考えられる。

二番目の柱は、初等・中等教育と密接に連携することである。外国の博物館に行くと、数多くの児童・生徒が博物館の標本に直に触れ、館員と対話し、自然について学習をしている。日本の博物館も、もっと初等・中等教育と密接にリンクして、若いうちに自然の仕組みを理解してもらう場を作ることが必要である。そうすることにより、その子どもたちが大人になった時に、我々にとっても非常に強い味方になっていくに違いない。

三番目の柱は「博物館も街に出よう」ということである。来ないならば出向けばよい。最近、“サイエンス・カフェ”とか“出前授業”などが各地で開催されている。これらの活動に積極的に参加することが重要である。その際には、マスメディアに積極的に働きかけ、うまく利用することも考えたい。

最後に、「パレオパーク」計画について述べる。2008 年をコア年とする国際惑星地球年 (International Year of the Planet Earth: IYPE) が始まっている。IYPE は、「社会のための地球科学」を目指し、10 のサイエンスプログ

ラムと幾つかのアウトリーチプログラムから成るが、この中に「パレオパーク」計画がある。「パレオパーク」とは、重要な化石産地を一種の観光地として整備していくことである。パークを訪れた市民は、なぜその場所にそのような化石があるのかを知り、化石の地球生命史における重要性を理解していくことになる。「パレオパーク」計画を推進するためには、化石とその背景となる地質に関する情報をわかりやすく提供する必要がある。また、産地の保全を図る必要がある。地域に密着した博物館が情報発信の主体となるべき計画ではないだろうか。

おわりに

「理数離れ」が叫ばれて久しい。現在、日本の理科と数学に関する学力はOECD参加国の最低水準にまで下落した。理科教育の基本は、自然を好きになり、その仕組みを知ることである。そのためには、自然に触れ、実感することが第一歩となる。博物館およびその活動は、まさに理科教育の基本を担っていると言っても過言ではない。博物館の役割と博物館への期待は大きい。

